

松山幸生先生講述

ヘブライ人への手紙に学ぶ

1996年1月から1998年10月

全33回--6

2022年01月

写者

小原靖夫

第6回 天の召しにあずかっている聖なる兄弟

第3章①節から⑥節 イエスはモーセにまさる

- ①だから、天の召しにあずかっている聖なる兄弟たち、わたしたちが公に言い表している使者であり、大祭司であるイエスのことを考えなさい。
- ②モーセが神の家全体の中で忠実であったように、イエスは、御自身を立てた方に忠実であられました。
- ③家を建てる人が家そのものよりも尊ばれるように、イエスはモーセより大きな栄光を受けるにふさわしい者とされました。
- ④どんな家でもだれかが造るわけです。万物を造られたのは神なのです。
- ⑤さて、モーセは将来語られるはずのことを証しするために、仕える者として神の家全体の中で忠実でしたが、
- ⑥キリストは御子として神の家を忠実に治められるのです。もし確信と希望に満ちた誇りとを持ち続けるならば、わたしたちこそ神の家なのです。

それでは、今日は3章の①節から⑥節を中心に、皆様とご一緒に御言葉に聴いて行きたいと思います。

第1節、

「だから、天の召しにあずかっている聖なる兄弟たち、私たちが公に言い表している使者であり、大祭司であるイエスのことを考えなさい」

「だから、天の召しにあずかっている聖なる兄弟たち」という呼びかけがなされております。この「兄弟」、これはアデルフォスと言うギリシャ語が使われているわけですが、ヘブライ語における兄弟アーハという言葉はユダヤ人にとっては、とても重い響きをもった言葉なのです。元来このアーハというのは「同胞」というような言葉なのですが、イスラエルの人たちにとってはこの同胞という言葉が違った意味で受け留められていたのです。

(兄弟とは、その深い意味を学ぶ。まず、旧約聖書における兄弟概念)

それは先ず第一に、この言葉が「イスラエルの共同体に属している者」という基本的な理念の中で使われていた言葉だということです。

この「イスラエル共同体」と呼ばれている一つの群れは、「出エジプトという出来事を通して、神が抑圧者のエジプトに課された犠牲によって、神に贖い取られた民族なのだ、そして神が所有してくださる家族なのだ」という意識をもっていました。

従って、その共同体に属する各々のメンバーは血のつながりに等しいほどの結束を持っていたのです。この家族の結束というのは、その家族の絆のために、血と汗を流した人を思い起こすことによって強化されると言われています。先祖を思うというのは少なくともそういうことではないかと思えます。結局、同じような意味で「イスラエル共同体」にとっても、自分たちのために血と汗を流した人を想起することは、非常に大切なことであり、そのことによって共同体の絆がいよいよ強化されていったのは、ご承知のことだろうと思えます。

例えば、年に一度守られている「過越の祭」というのは、「あの出エジプトの出来事を記念したもので、そこでの奴隷生活の苦しみや、鴨居に血を塗ったイスラエル人の家を除くエジプト中で初子が犠牲として神に取り上げられていったゆえにイスラエルが自由の身を獲得していった、そういう苦しみや悲しみ、あるいは、神の護りと恵み、更には四十年間の荒野での試み、ということをおもひ起こすとき」として捉えられていったのです。

「そういうことを記念して、自分たちの先祖に心を向け、また自分たちは『それ故に、一つなのだ』ということをおもひ起こしている群れである」という意味で使われているヘブライの人の『兄弟』という言葉は、私たちがいわゆる軽い意味での「同胞とか仲間たち」という程度に捉えてしまうと、ここで書かれている『兄弟』という言葉の意味は、全く私たちには通じなくなってしまうのです」

ところが、その「兄弟」という言葉の重さは時には、自分たちが選民であるという意識をより鮮明化することによって、神の御心からはみ出してしまうという危険性さえをも孕んでいたのです。つまり「異邦人」という言葉や、「罪人」という言葉を使ってイスラエル民族以外の者を厳しく峻別していくことにより、「自分たちは兄弟であるということの意識を殊更強固にしていった」という部分もイスラエル民族の中にはあったのです。よって、「彼らにとってあの出エジプトで起こった神の救いのわざ、解放のわざこそが『彼らが今神と共にあるという自意識への原体験になっている』と捉えてよいと思えます」

(神の救いに関する真理を自分たちユダヤ人が独占していると考えた排他性をパウロは批判した。パウロを正しく理解するためには、彼の議論と当時のユダヤ教の文脈に位置づける必要があります。――信徒の友 2021年11月号p18「新約聖書はユダヤ教をどう捉えているか、中野 実/東京神学大学教授――より引用)

「神はこのようにして我がイスラエルの歴史に介入なさり、自分たちを救ってくださった、そしてそういう神との関わりなしには自分たちの「今」は存在していない」という認識で彼らは贖われた者としての共同意識というか、連体意識といったものでしっかりと結び合わされており、お互いを「兄弟」と呼ぶ。時には、そういう「神の贖い」がその中にきちんと位置づけられて呼び交わされていた。この手紙はそういうイスラエルの人、ユダヤの人、ヘブライの人に向かって書かれた手紙ですから、ここで「兄弟」という言葉を

使っているのは、正にそういう特別な重みをもった言葉として使われているのだ、ということ覚えておいてほしいと思います。

(松山先生は一つの言葉にも歴史的背景を詳細に説明してくださっています) 168

特に「兄弟たち」という言葉が何度も何度も出て来ますけれども、その時、私たちはいつもきちっと焦点を合わせて見る必要があるのです。それは同時に「その兄弟意識が、あなたがたの罪の根源でもあったのだ」ということを、このヘブライ人への手紙の中では語っているのです。

そして更には「偏狭な兄弟意識が打ち壊されて、新たに拡張された兄弟意識というものを再構築することが大切である」と読者に対し訴え続け、変革を与え続けている。そういった二つの主張があるのです。

彼らヘブライ人は特別に選ばれた神の民であることを誇りとし、そのことが、彼らをして背筋をそらせて「兄弟」と呼ばしめているものなのですが、そのこと自体は間違っていない。

けれども反面、それが彼らを頑なな民としてしまっているとすれば、ヘブライ人を奴隷としてエジプトに縛りつけようとしたあのエジプト王パロと何ら変わらないではないかというわけです。

「神があなたがたを解き放たれて自由な者としてくださったとするならば、あなたがたはその自由をもって、もっと多くの人と心を通わせ、神の愛の中に生きる共同体として、自分たちを位置づけていくべきではないか」

私たちはこれを書いた人の切実なる訴えを、この「兄弟たち」という言葉の中から読み取っていく時、その言葉を聴く度に、その背後にある意識に心を向けていくことが、とても大切な部分になっていくのではないかと思います。

因みに「申命記」という書物は、(この前と一緒に学びました時に申しましたが) 偏狭な民族意識に対して割合ゆるやかな神の贖いが世界に及ぶのだ、みたいな考え方をもった書物なのですが、そこでも「兄弟」という言葉は「ユダヤ人たちに限定して」使われているのです。そして、神が愛を示してくださったと言っている、よその国からの寄留者たちに対して「あなたがたは彼らに親切にしなければいけません」と言っているけれど、その寄留者たちは、彼らにとっての『兄弟』では決してないのです。

もう少し視野を広げてみれば、結局、他のグループに属している、例えば律法に生きることのできないでいる人々に対して「兄弟」という言葉を彼らは徹底して使わないのです。

「愛の対象、則ち、心に向けなければならない対象」ではあるけれども、自分たちの真の仲間ではない。「兄弟ではない」というすごい頑強なものが、この申命記の中にも見え隠れしているのです。

(新約聖書における兄弟概念)

ところが、この「新約聖書」の中では、「本質的に、そういう、いわゆる民族性というアイデンティティーの壁が突き破られている。そしてキリストを信じるメンバーであれば、誰でもがみな『兄弟』なのだ。」という新たな共同体形成の発想があるわけです。その中では、パウロ流に言えば「ユダヤ人もギリシャ人もなく、奴隷も自由人もなく、男も女もない」、そういう一切の壁が取り払われて、神が愛されているという、神様の側の一方的な行為によって、「兄弟」というものは作り上げられている、共同体は生まれて来ているのだ、というような考え方を提示しているのです。そういう広い視野に立って、「兄弟」という言葉を使っていく、そういう使い方をして、新約聖書の中では174回「兄弟、兄弟、兄弟」という言葉が出て来ているのです。

「そういう広義の兄弟」という言葉と「ユダヤ人たちがもっている極めて狭義の兄弟」という言葉との間に立ちはだかる大きな壁が、「『イエス・キリストの贖いというわざ』によって初めて突き崩されていった」のです。

(現実的な事例)

もう大分時が経ちましたけれども、1989年ベルリンの壁が突き崩されたという歴史的な事件がありました。その瞬間まで、彼らは壁の西側でも東側でも同じように、「私たちはドイツ民族なのだ」と言っていたのですけれども、両者には東の奴とは違う、西の奴とは違うという意識が確かにあったのです。

東の人々に対しては「自分たちと違うのだ」と西の人々は考えていたし、東の人々は彼らを見て「彼らはもう西欧文化にまみれてしまって、純粋な信仰を持っていない」みたいなことを考えていました。そして、神を信じ祈って、東西をいつか一つにしてくださるということは信じ合っていたのですが、壁を挟んで相互に「どうか、彼らのあの頑なさを打ち砕いてください」とか「あの墮落した姿から救ってください」とか、てんでに祈っていたわけです。

それが、壁が突き崩されることによって、「そうではなかったのだ」ということがお互いに分かって来た、そういう事実があります。(このように歴史意識を読み取ることを教えてください。凄い勇気だと思います。) 171

「正に、今日の教会に属する私たちが、自分たちで造りあげたそういう”壁”を持ったまま『兄弟』という言葉がかつてユダヤ人たちが自分たちを『兄弟』と呼んだのと同じような感覚で、使っていないだろうか」ということを考えてみなければいけないのではないのでしょうか。

(ヘブライ人への手紙の著者の強調)

ここまで、だいぶ「兄弟」という言葉にこだわってきたわけですが、結局、そういう意味ではこのヘブライ人への手紙の著者が「兄弟たちよ」という呼びかけをしていることの中に、「積極的に兄弟としての責任を負い合おうではないか」という姿勢が満ち満ちていると思うのです。

「あなたがたはユダヤ人であり、かつてユダヤ教を信じていて、イエスを十字架にはりつけにしてしまった。しかしそのことをもう問うまい。キリストはあなたがたを愛し、あ

なたがたのためにも命を捨ててくださったのだから、私はあなたがたと兄弟でありたい。いや、むしろキリストはあなたがたを私たちの兄弟として与えてくださっているのだ」というような確信をもって呼びかけています。

それゆえ、かつて罪に染まり、神を神として受け入れることのできなかつた人に対して、「キリストが『兄弟』としてくださったのだから、私たちはその責任を負い合おうではないか」という呼びかけが、そこには込められているのではないかと思います。ですから、この手紙は、「今までのように民族に限界づけられた兄弟ではなく、あるいは律法の本質である愛からはみ出て、律法の細かな条項を守りきれぬかどうかによって判断される兄弟という意識でもない。むしろ、律法の根底を流れている愛に根ざして、そこから神によって支えられている、当時罪びとと呼ばれた人や他国の人々をも含めて『キリストが命を捨ててくださり、その愛の中に捕らえてくださったすべての人々と共に兄弟である者』というここでは非常に新しい意味を、『兄弟』という言葉に込めながら語っています」

私はそのことにこだわって「兄弟」という言葉を盛んに語ってきたわけで、この言葉がある意味では「ヘブライ人への手紙の中で非常に重要な意味と位置を占めている言葉ではないか」と考えるのです。

ですから、「兄弟たち」という言葉を使いながら、独善的な特権意識の中に陥っているユダヤ人に対しては、マタイによる福音書12章における、イエスが弟子たちに向かい、あるいはユダヤ人に向かって「わたしの兄弟、わたしの母とは誰のことか。神のみこころを行う人こそわたしの兄弟姉妹、また母である」とお答えになったところを思い出します。

救いの恵みにあずかる者がすべて兄弟姉妹なのだ、神の言葉に生かされている者がすべて兄弟姉妹なのだ、イエスをキリストと信じる一点において結び合わされている人々こそが真の兄弟であり、姉妹なのだ。そして、そのようにして出来上がった兄弟姉妹という共同体はどういうものかというと、各自がその中で自己完成を一生懸命に求めていく「閉じた共同体」ではなく、むしろ自分たちが革新させられていくことを願い求め、新たに造り変えられていくことを信じながら、すべての人を兄弟姉妹とすることのできる可能性をもった「開かれた共同体」であり、「そういう共同体の中に存在している『あなた（親称の二人称）』という意味での『兄弟』ということなのです」¹⁷³

従って、この兄弟という言葉は、聖書そのものがそう言っているように、「今や」「一つの恵みが与えられて、兄弟（三人称）であると同時に、真の兄弟（二人称）となりつつある群れであり」、「やがて」「大きな兄弟を形成してゆく共同体としての根幹を成す核になるような兄弟なのだ」という意味では、兄弟解釈は固定化されず、柔軟な広がりをもつるわけです。そういう共同体として生きている『あなた』という呼びかけが、ここには出て来ているのだと思います。

この手紙は「ヘブライ人への手紙」と書いてあるわけですから、ユダヤ人がこの手紙の

受け手であるということは、何よりはっきりしているわけですが、手紙全体から受ける印象は、この受け手として想定されている相手（モデル）は、律法とかユダヤ教の祭儀とかそういうものに関して非常に高い関心を示している人であったのではないかと考えられます。

だから、この手紙の中に、例えばユダヤ教の中でもごく限られた人々が用いる言葉が沢山出て来ます。例えば、このあとに出て来る「大祭司」という言葉も、実は一般のユダヤ人たちはあまり関心がなく、問題にもしていない言葉なのです。通常は「祭司」でいいわけです。それにもかかわらず「大祭司」という相当学問のある人々のみが問題にしていた言葉がポンと出て来るわけですから、相当にレベルの高いユダヤ人を手紙の受け手として書かれているのではないかなと思います。（174-175）

そういう意味では使徒パウロも、「私はユダヤ人の中のユダヤ人だ」などと言っています。「律法に関して私はほとんど完璧に守って来たのだ、教えも全部知っているのだ」と言っていますから、受け手は、そういうレベルに属するユダヤ人だったのではないかと、そのように思うのです。ですから、彼は「当時のローマ帝国では、ユダヤ教の主流の中で、キリスト教はユダヤ教の一派である、という捉え方をした」ことを知っていたわけです。

そういう意味では、キリスト教は、ユダヤ教の流れの中では極めてマイノリティ（少数派）グループであって、しかも当時のユダヤ教の人々の中からは、あれは異端なのだとかえ言われたような状況の下でしたが、この優れた人がキリストと出会って、イエスをキリストとして受け入れ、そういう信仰告白に至ったわけですから、その人にはどんなにか激しい闘いがあったのだろう、そしてどんなにか大きな回心の出来事があったのだろうと著者は推測できるのです。

パウロのあのダマスコ途上の回心と同じように、この手紙の受け手もどこかでそういうキリストと出会っているのでしょう。だからこそ彼は、イエスをキリストと信じることができたのだと思うのです。しかし迫害の嵐の中で、このキリスト教というマイノリティの信仰をもっている彼が、もう一度ゆさぶられ、「本当にイエスはキリストだったのだろうか？」と考えざるを得ないような厳しい現実の圧力と言いましょか、ユダヤ教からの非難「イエスをキリストと信じているからお前はそのような目に遭っているのだ」というような罵声」が集中砲火される中で、彼は本当に今や、自分の信仰がゆさぶられている状態にあるのではないかと容易に想像できるのです。（この言葉は私に鋭く突き刺さってきます）

そういう人に対して、このヘブライ人への手紙の著者は、今、励ましを与えようとしてこの手紙を書いている、そうとてよいと思います。

ですから、「あなたは兄弟となるために、先ず天の召しにあずかっている」と書いているのです。（3章の①節は、「だから」という接続詞で始まっています。その「だから」を丁寧に歴史的な背景を見逃すことなく解説されているように私には思われます。深い読解に心が打たれる思いです。）

（呼び出された者）

「天の召しにあずかっている者であり、聖なる者とされている者である、そういう人々が私と兄弟なのだよ。」「私たちが兄弟となるためには、天の召しにあずかり、しかも聖なる者とされるという二つの大きなハードルをクリアーしているはずなのだ」と著者は言うのです。

この「召し」という言葉、クレーシスとギリシャ語では言いますが、このクレーシスの派生語カレオーは「呼び出す」という意味をもった言葉なのです。

「教会」は「呼び出された者の群れ」と言われていますが、正に「召しにあずかった者の群れ」なのです。ですから、あなたは自分の意思ではなく、「呼び出されること」によってこの群れに属したのです。

キリスト者であるということは、「神の一方的な計画によって招かれ、召され、加えられ生かされている存在であるのだから、あなた自身の努力や精進があなたをキリスト者にするのではなく、神があなたを完全にキリスト者であり得るように育み、養ってくださるの者である」と言うのです。¹⁷⁷

精進をすることが信仰の中では大切なことのようによく考えられます。慈善を行なうこと、愛に生きること、何かそのような具体的な目標を掲げますと、それを一所懸命クリアーすれば自分は一步前進できて一步完成に近づくのだ、そういう発想がユダヤ教を強く批判している教会の中にもあるのです。礼拝によく来ていますとか、教会のご奉仕を熱心に行っていますとか、それらを一つ一つクリアーすることによって「自分は『クリスチャン』になって行くのだ」という考え方です。

ところがそうではない。神は、「私たちがどんな状態であっても、イエスをキリストと信じ、その救いを受け入れるならば、クリスチャンなのですよ」と言っているのですから。

救いを受け入れる状態というのは、よく考えて見ると、

本来自分が一番駄目で弱い状態の時なのですから。

救いなしには立てない状態の時なのですから。

そういう状態でも、クリスチャンであると神は認めてくださるわけですから。

「そんなクリスチャンが、本当のクリスチャンになるためにはどうしたら良いかと言えば、その神によって育てられ、養われて行くしか道がないのです」¹⁷⁷

「裁きの日、終わりの日」という言葉を用いる時、それまでに私たちが完成していれば、裁きの日には神の前に立って天国に行ける、というような発想をしてしまうことが多いのです。けれど、私はむしろ逆に、「この裁きの日、キリストは私たちが完成してくださるのだろう。私がどんなに弱く破れた存在であったとしても、キリストがおいでくださって、この私を確かにご自分に贖われた者と捉えてくださる時、私は初めて「完全」になれるのではないだろうか。だから今、不完全であろうと、今、不十分であろうと、そんなことは私が救われない理由にはならないのだ。」という大変図太い信仰をもっているのです。

だから、終わりの日に向けて精一杯頑張れという意味の掛け声、「頑張ろう！」（まあ頑張ろうと言ってもいろいろな頑張り方があるわけですが）なんて私はあんまり口にしないのです。

私は終わりの日に向けて、本当に平安のうちに楽しみながら、与えられた道を歩いて行こう、讚美と喜びの中で毎日を過ごすという感じがあって、何が何でも頑張っって何人に伝道しましょうとか、何人救いましょうとか、あまりそういったことを考えないのです。だから私は牧師としてはアウトサイダーなのだと思うわけですが、少なくとも聖書の信仰に生きるとそうなるだろうと思います。（アーメン）

私が自分の力で完成できるのだったら、救い主はいらないのです。できないからこそ、救い主が必要なのです。（闘病中も松山先生は澁刺として讚美され、かくしゃくとして説教をされた。病を歎くことは一度もされなかった。それがごく自然な先生の在り方でした。救いの確信と希望に満ちた誇りを持ち続けられました）

（召された者、聖なる者とは）

ですから、3章の①節で、「召された者」とか「聖なる者」と言っているのは、決しておだてているわけでも、褒めているわけでもないのです。

逆に言えば、召されなければどうしようもない者、神が召してくださることによって意味づけられた者という意味なのです。

あるいはこの「聖なる者」という言葉、これはハギオスという言葉なのですが、前から何度も申し上げていますように、これは清く立派な聖人君主のような、という意味とは全然違うのです。「神のものとして神によってこの世から区別されている人」なのです。

牧場で沢山牛が放し飼いになっている時に、身体に付けられている焼き印を見て、

「あれはうちの牛」「これはうちの牛ではない」と区別していきます。ここではわたしのものとして区別されたのが「聖なる者」という言葉の意味なのです、神のものとして区別されたもの、そういう意味でしかないわけですから、本質的にそれは私たちの側には何も資格も責任も価値もないのです。

神が自分のものと仰ってくださったから、神のものになっている、それが「聖なる者」なのです。「神によって愛され、神によって支えられ、神によって招かれ、神によって召され、そして神によって御自分のものとして、御手の中に支えていただいている」、そういうあなたがたは信仰共同体の中の存在なのです。すべては神に原因譚があり、神にすべての拠り所がある、そういう群れの中に『あなたは一緒に生きています』ということ、ここでは語っているわけで、その神の憐れみによって神との関係を回復されている

「あなたがた」それが「兄弟」、特に新約聖書で言い兄弟なのです。だから「今、キリストを信じることのために受けている迫害や苦難の中にあっても、イエスに対する信仰を揺るがすことなく持ち続けていく、そのことこそが大切なのです」ということをこの一節の後半で、「わたしたちが公に言い表している使者であり、大祭司であるイエスのことを考えなさい」と示しているわけです。179

つまり、私たちが「イエスは主である」と言っているその意味、内容をもう一度深く「考えなさい」という言葉は、別な意味から言うとそのことに対して「心に向け熱心になりなさい」という意味なのです。だから他人の信仰がどうのとか、信仰がなければどうだとか、よそ事を考えないで、「イエスのことについて一所懸命考えてゆきなさい」「しっかりイエスの人格を捉えてごらんなさい」という風に言うのです。

それではその中でイエスに対しどういう捉え方をするのかというと、二つの点から捉えなさいと言っています。

一つは、「使者であるイエス、仕え人であるイエス」。人間の兄弟同様の一人となってくださった、そして、それゆえに人類全体の責任を負う「隅の親石」となってくださった真の人イエス。これが「使者」という言葉で書かれている内容なのです。

「神の国から遣わされた者としておいでくださったイエス、そういう御方に先ず心に向けなさい」と。

それからもう一つは「神の啓示の究極的なメッセンジャーとして、私たちの所に遣わされて来られた真の神なるイエス」その御方に心に向けなさい」と

この「使者」という言葉をキリストの「神格」をあらわす言葉として捉えるとすれば、その後の「大祭司」という言葉はキリストの「人格」、人としての姿の最高峰を表す言葉として受け留めてもよいと思うのです。¹⁸⁰

あなたがたがそのイエスに対して公に言い表している信仰、それをもう一度しっかり確認しなさい。そして「人々の前に高く掲げて、自らの信仰を告白し、闘いを進めていこうじゃありませんか。今、あなたは真っ只中にいるのではないか、だからグラグラしないで、その御方のことに先ず心を集中させてゆきなさい」と呼びかけているのです。

(エジプトでの試練は神の御心であった)

後の部分でも多少出て来ますけれども、あなたがたの先祖であったイスラエル人は、神の召しをいただき、聖なる民とされながら、エジプトの荒野の試練の中を歩いていた。試練に遭ったというのは、彼らが神の言葉に従ったから遭ったのだ、神に召されたから、神のものとされたから彼らは荒野の四十年間の旅を続けたのだ。もしそうでなかったら彼らはエジプトで、ある意味においては食べる物に心乱されることもなく、辛い奴隷の存在であったとしても、歴史の中ではうまく生きることもできたでしょう。しかし神のものとされることはそのようなことに甘んじるのではなく、たとえ苦難があろうとも神のものとされている名誉、喜び、感謝、誇りに生きることなのです。

相手先はユダヤ人ですから、そう言われれば正にその通りだともう一度確認をする、奮い立つことは事実だと思うのですが、そういうことをこの第①節の中できちっと語るのです。

「あなたがもっている誇りを捨てないで生き続けなさい。しかもあなた方は優れている

のでもなければ、力があるのでもなく、神が愛してくださっているがゆえに、今このような戦いを闘っているのだ。それは神の愛の証しなのだ。だから、あなた方はその戦いを闘い抜かなければならない。この試練の真只中でも信仰を告白して、その信仰に堅く立ち続けて歩いて行くことが大切なのだ」ということをここで呼びかけてゆきます。181-182

先程ちょっと申しましたけれども、このヘブライ人への手紙のここから少しの間ですが「大祭司」という言葉が大変重要な意味をもった言葉として登場して来ます。

「この手紙の中の一つのキーワードになっている言葉」ではないかとも思いますが、「神に等しい御子である御方が、神の自由さをもって、自ら被造物に身を置き、人間としての悲惨を負われた」。

また、2章の⑦節のところでも「あなたは彼を天使たちよりも、わずかの間、低い者とされたが、栄光と栄誉の冠を授け」と書かれているし、結局、イエス・キリストの父なる神に対する服従ということを非常に強く訴え、そしてそのことが、キリストがあなたがたの一切の罪を担うために必要なことだったのだ、これはフィリピの信徒への手紙の2章の中にも出て来る言葉なのですけれど、そういうイエスが、私たちのもっているあらゆる悲惨を御自分の身に負うてくださる、身代わりとなって担ってくださる、そういう現実を「大祭司」という言葉の中に込めているわけです。182

「イスラエルの人たちの罪を背負って、神の前に贖罪の供え物を献げる、それが大祭司の務めだったわけですから、正に、イエスは御自分がその罪を皆負ってくださったのだ。イエスは、イスラエル共同体のために日々仕えていた大祭司のように、すべての被造物のために祈り、執り成し、労苦し、試練を受けられ、自ら贖罪の供物となられた十字架の死に至るまで、忠実に大祭司としての務めを果たされた」その御方にあなたがたは心を向けて生きなさい。

キリスト・イエスは人間の傷みを徹底的に担われ、そのことのために真の人としてこの世に来られた、それがあなた方の知っている「ナザレのイエス」なのだ。

真の人であり真の神であられるイエスと出会い、イエスに触れて、人格的な交わりがそこに始まり、具体的にイエスの生き様を体現する、そういった時に、私たちは初めてイエスが歩まれた道を共に歩むことができるようになる、言い換えれば、イエスの愛を生きることができる者になる。そして、その人格を身近に思い起こす時に、私たちは新たな生の力を与えられる。今どうなのかが問題ではなく「あの御方に私たちが一心に心を向ける時、私たちは新しい者にされるのです。「人もしキリストにあるならば、日々新たに造られた者である」という御言葉が意味していることと似ている同じ内容がここでは語られていると言ってよいと思います。

この一節の短い中にそれだけの内容を込めながら、この著者はこのユダヤ人に向かって、特にキリスト教に改宗してしまったがために難難に出会い、困難を受けているユダヤ人キリスト者のために手紙を書き送るのです。

本当に彼は「あなたがキリストを信じたのは恵みなのだ」ということを厳しい闘いの中

に在る者に訴えかけているのです。むしろ「幸いなのだ」と大声で言いたいわけです。そのことを言うためには、やはり彼のもっている旧約聖書の知識を基本にしっかりと据えて、新約のキリストに立っていることが必要だったので、「兄弟」とか「大祭司」という言葉を使いながら、そのユダヤ人に向かって呼びかけをしたのだと考えて頂いていいのです。184-185

(①節をこれ程に詳しく語られた解説書が他にあるだろうかと思ひます。ユダヤ教に回帰しようとしている、迷えるヘブライ人に、愛情をもって親切に、しかも毅然と「天の召しにあずかっている聖なる兄弟」と呼びかける著者の声は、今、ここで、松山幸生先生のお声を通して私自身に語りかけています。「天にまします我らの父よ」と「呼びかける」こと自体が恵みだと教わりました)

第2節から4節、

「モーセが神の家全体の中で忠実であったように、イエスは御自身を立てた方に忠実であられました。家を建てる人が家そのものよりも尊ばれるように、イエスはモーセより大きな栄光を受けるにふさわしい者とされました。どんな家でもだれかが造るわけです。万物を造られたのは神なのです」

今日のテーマの「イエスはモーセにまさる」ということの中心的内容が書かれているところです。

ここでは、「イエスの人格を思い起こすことの意味」を、旧約時代の指導者「モーセとの対比を通して語りかけている」。そこで、「モーセはどのような人格としてイスラエルの人々に理解されていたのだろうか」ということが、一つ重要な問題になって来ます。

(引き出された者モーセと神の出会い)

かのモーセの生き方を決定的にしたのは、モーセ自身予想もしなかった「正面切つての神との出会い」であったのです。少なくともこの著者はそのように考えています。モーセは同胞のイスラエル人を打ち据えるエジプト人を殺害して追われる身となり、すべてのエジプトの人から身を隠して、ミディアンの野にいた時に、神はそこで燃える柴の中から正面切つてモーセと出会ってくださっているのです。

彼は「わたしはあなたの神である。あなたの立っているところは聖なるところである。履物を脱ぎなさい」とお命じになる神と直接的に出会うのです。

無論ここで神と出会うとは、神のお姿を見るときか、こんな存在だったよと絵を描くことのできるような出会い方ではありませんでした。はるかに彼を超えた御方が、その被造物なる自分と御声を通して出会われるというお出遇いを、彼は直接的に経験するのです。

誰かの口を通してとか、誰かを媒介にしてではなしに彼は神を経験しました。そして、燃える柴の中から神は御自分を啓示された。そういう原体験ともいえる神との出会いから、モーセはただ神の召し出しによって、旧約聖書の人物の中でも最も卓越した者の一人として、あるいは、神に生きた人物の一人として押し出されて行ったが、それはモーセという人間が、素晴らしかったのではないのです。

しかも「モーセ」という名前自体がそうなのです、「引き出された者」という意味なのです。「神から引き出された者」として、正に、神なしには存在できない者として、彼はそこに生きているわけですから。そういう輝かしいモーセ像が描き出されていますが、そのモーセ自身は、自分の人間としての限界を良く知っていたのです。彼は神から召された時に、「まったく私は口が重く、舌の重い者です」とお答えするのです。ところが神はそんなことお構いなしに、そのままのモーセをエジプトに連れて行ってパロと出会う、言い換えるとモーセに力があるからパロと出会うのではないのです。神が用いてくださったからパロと出会った。モーセがパロに勝てるから、パロの前に立ったのではないのです。

185

これが結局、今迫害の中にいるユダヤ人に対して、「あなたがイエスをキリストと信じて生きていることは、『あなたがこの世に勝てるからではないのです。この世に負ける存在かもしれない、それでも神がこの世において立ち上がるように命じられているから立っているのです』ということなのだ」とモーセの話をしながらこの著者は訴えていこうとしているのです。

ただ神は、この弱い破れたモーセ（事実上の殺害者）をパロのところにお遣わしになる時に、一つだけ根拠になることをお語りになりました。それは何かと言うと「わたしは必ずあなたと共にいる」わたしがついていからとおっしゃった。「わたしは必ずあなたと共にいる」というのは裏返して言えば、「あなたにはそう思えないことがあるとも、すでに、わたしはあなたと一緒にいるのだ」ということなのです。（「わたしはあるという者だ」を新しい聖書協会共同訳では「わたしはいるという者だ」と改変しています）

それは、日頃私たちが言っていることとは大分違うのです。今日は「ついてい」からうまくいった、と言うことはよく口にしますが、神は、たとえあなたが「不運」でうまくいなくても「わたしと一緒にいるのだ」とおっしゃる。それが、実は神がモーセをお召しになった時の言葉なのです。

そういう神の招き、呼びかけに、やはり私たちは心を向け、思いを向けていくことが大切なことなのです。モーセは苦闘しながらも徹底的に神の導きにすべてを委ね、すべてを賭けて自分の生きて行く生を選びとっていきました。そして欠けの多いイスラエル共同体の一員として、自ら徹底的に神に忠実に生きようとしていました。モーセは、あくまでイスラエル共同体の中で、一生懸命生きようとしたのです。186

この偉大な信仰者としてのモーセ、彼は預言者であり、祭司であったわけですがそれでもそれ以上でもそれ以下の存在でもなかった。そういうように、モーセを捉えることができるのです。モーセが死んだ時に、イスラエルの人々はモアブの平野で三十日間モーセを悼んで泣き、モーセのために喪に服し、その期間が終わったと出エジプト記は書いていますが正にそうなのです、死んで終わってしまうのです。それは「人間」ですから。

そういう一個の被造物にしか過ぎないものを神格化したり、あるいは神のように捉えたり、絶対化してゆく罪は冒してはならないとのです。

「モーセという人間はいたっていなくたって構わない」、みたいなことを私は時々言うことがあるのですが、そういう実在があったかどうかは問題ではなく、そのように神は人を生かすのだということを学ぶ方が大事だと、私たちの中で本当に認識される必要があると思うのです。「モーセは立派だった、あんな立派な人格をもったモーセはなんて」と評すると、下手をするとモーセが神になったりして、モーセ信者ができたりすると大変なことになるわけです。そういうことにならぬことを、ここでもう一度確認しておかなければならないと思います。

被造物の神格化とか、絶対化、偶像化、それは結局人間の絶対化に結びついてゆくと、そのことが差別を生み出したり、序列化を生み出したり、結局「選民意識」というものがそういうところに結びついて生まれ出てしまった。やはり、そういうことを避けていかなければならないのです。

187 (偶像を造りだすことは人間を絶対化すること。近代文明は偶像を造り出し過ぎたと私は思う)

モーセがシナイ山で律法を受けるために神の御許に上がっている間、イスラエルの人たちは待ちくたびれてしまって、不安の中でとうとう金の子牛を造って、それを神と崇めたりしてゆく、身近な、目に見える助け手が欲しいと考えるようになる。そういう、信仰によって忍耐することができないで、見えない神に信頼してゆくことがなかなかできない私たちの在りようというのが、この苦難の中にあるユダヤ人を例に挙げて、あなたがたはそうであってはならないのだ、という言葉で訴えていくわけです。

神は、そういう破れた人間世界の真っ只中に、イエスを上から送ってくださった、人間とは比べようにならない超えた存在として送ってくださった。そして万物の相続者として立てられたイエスは信仰による忠実さをもって人間として生き続けられた。私たちはそういう御方の全存在を受け入れ、その全生涯を神の前に全き者として献げ生きられたイエスの御姿に心を向けて、見なさい「大祭司であるイエス」はそういう御方なのだ、ということを語ろうとしているのです。

3節

聖書の中の信仰にある「家を建てる人が家そのものよりも尊ばれる…」というのは、当時の一般の社会の中でも言われていたことなのですけれども、「家を建てた御方が住まれることによって、その家は貴く生きて働いて来る」という意味です。

つまり「家であるイスラエル共同体は神によって建てられたのだから、そこに神がお住みにならない限り、それは何の意味ももたない、神を抜きにしては何の意味も持たない存在なのだ」ということを、言おうとしているわけです。

神が万物の相続者として定められた御子をイスラエルに与えてくださる、その家の中に共にいてくださる。そのことが正に、私たちが神の民であり、兄弟である拠り所になるのです。

言い換えるなら、この神の家は、ただ単にイスラエルだけではなく、全世界が御手によって創られ、神によって立てられたのだから、そのすべてが神を受け入れるべきなのだ。

そして、その信ずる群れを通して世界がやがて一つの家とせられていくことを、私たちは信じて生きていこうではないか。あなたを迫害する者もまた、神の家として立てられた存在なのです。神がお宿りくださる時に、彼らは私たちの兄弟になり得る者なのです、だから、あなたがたが排除する対象ではなく、贖いのために祈っていく対象、執り成しの対象としてイエスが「あなたを責める者のために祈りなさい」と仰った。正にそういう意味だと思っていただいても良いのです。（松山幸生先生の政治への働きかけは敵対するのではなく、祈りによって共に目覚め真実への道を歩もうという呼びかけをもって国会の前で、デモ隊の騒乱の中で静かに祈られた。その姿勢は忘れられてはならないと思います）

私たちはこのイエスの人格を身近に思い起こすことによって、そこに神の一回的な啓示を徹底して見ることが出来ます。また歴史上に、他の偉大な存在も輝かしい業績を上げた被造者も決して神格化するべきものではなく、神御自身だけが本当に私たちに対してすべてを与える御方なのです、ということ、もう一度確認していこうではないかと訴えるのです。189

イエスは、御自身を立てた御方に忠実であられました。父なる神に対して忠実であることが根本的に大切なのですと仰います。そして私たちは、人となられた神御自身、真の神、そのイエス御自身が十字架の死を通して、三日目の復活を通して、贖いとなってくださり、救いとなってくださったことを身近に覚え、そのイエスに忠実であり、そのイエスの兄弟となることが、神を神として生きる姿なのですと、この4節までにかけて語っているのです。190

第5節、6節、「さて、モーセは将来語られるはずのことを証しするために、仕える者として神の家全体の中で忠実でしたが、キリストは御子として神の家を忠実に治められるのです。もし確信と希望に満ちた誇りとを持ち続けるならば、私たちこそ神の家なのです」忠実に神の前に生き続けた『一つ的人格』それを、旧約聖書では『モーセ』という人を一つの代表として捉え、そして、新約聖書の中では『新しい歴史の中で受肉されたイエス』という御方が、このモーセを超える人であり、神であられる存在として私たちに与えられ、その父なる神に忠実に生きた存在であられた。

モーセは限界があって死んだら終わりでしたが、イエスは十字架の上で死なれて、またよみがえられ、天に帰られ、なお、私たちを支えてくださっている。そういう神的力量を持った御方で、モーセを超えた存在であられることをはっきりと語っているわけです。

「モーセは神の家に仕える者」でしたが、「イエスは神の家を治める御子」としておいでくださっている。あくまでモーセは仕える存在でしかなかったけれども、イエスはこれを治められる御方なのだということがここでは明言されています¹⁹¹

私たちは、イエス・キリストがどういう御方なのかを考える時に、基本的には「この私がイエスを十字架につけて殺したという認識」がどうしてもないと、なかなかイエスの贖いとか救いが、私を整え、捉え、動かしていく力になって来ないのです。

頭の中では分かるけれど、行動の中ではイエスが救い主とは実感していないような生き方をしてしまう。丁度イスラエルの人たちが頭の中ではモーセが指導者だとわかっている、見えなくなってしまうと金の子牛を造って身近に置かないと安心できなかったと同じように、私たちは見えないイエスより何か身近な価値のありそうな安直なものを造り拝まない我慢ができなくなってくる、そういう破れみたいなものがあるのです。

しかし「私はあのイエスを十字架につけて殺したのだ、しかもそのイエスがこの私を贖ってくださった。そしてそのイエスがこの私を愛してくださっている」ということを考える時、その御方が今の私に対してどんな状態であるのかよりも、その御方がこの私に既に成してくださった愛のゆえ、その十字架の現実のゆえに、その御方に従うことを喜ぶことができるようになるのです。

ですから、「どのように従うのですか」とか、「どうやったらいいのですか」と、というようなことを言っている間はまだ「私はこの御方を十字架につけて殺した存在なのだ」という認識は欠落しているのです。例えば「永遠の生命を受けるには何をしたらよいでしょう」とイエスのところに質問に来た青年がいました。熱心なユダヤ教徒だったのですが、その答えを見出せなかった。言い換えると、この私があなただけに贖われ、救われなければ、この私が赦されなければ、私の「今」はないのだということを知らなかったのです。そのことを知ったなら、その御方を愛すること、どう愛したらいいのか、何をしたら良いのかということがわかったはずでした。それが救いの第一歩なのです。191-192

その御方を愛し従う時、私たちはどうしたら良いかを聖霊によって直接示され、行動が与えられて来るのです。そして、その御方の前に生き続けることが大切なのだ、ということが心に確認されていくのではないかと思うのです。（「行動が与えられる」との表現は難しいことだと思います。私たちは行動の次には「する」という動詞をもってきます。松山先生は一言を大切にされると同時に、松山先生にとっては、ごく自然に出てくる言葉です）

「私たちは、確信と希望に満ちた誇りとを持ち続けるならば」ということは、この御方こそ私を救い、この御方のみが私を愛し支えてくださるのだという確信、また、それゆえに神の国へと招いてくださる喜びとを既に経験しているならば（あなたがたがその希望に満ちて歩み続けるならば）、私たちは「神の家」となり得るのです。

私たちが「神の家」となる。神の恵みを持ち運ぶ存在となる。別な言い方をすれば、「神の器」となれる最大の条件は、私たちの汚れた手で殺したイエスを救い主として受け入れることなのです。私が十字架につけて殺したにもかかわらず、その御方が尚もこの私を愛し続けてくださるといふ愛を信じ、受け留めることなのです。そこからすべてのことが生まれて来るのです。

モーセには到底できなかった。しかしイエスはそれをなさるのだということです。

神の前に従順に生きたという言葉が、イエスに対して用いられ、モーセに対して用いられていますけれど、本当に大切なのは、このイエスの中にある贖いのわざ、このイエスの中

にある愛によって初めて、すべての隔ての中垣をこぼたれて一つにされる、憎しみを越えて赦し合い、愛し合うことができる。あるいは自分たちの大きな相違を超えて仕え合うことができる者に変えられ、「真実の兄弟になり得る」のです。

そのことのために、イエスは愛を注いでくださり、神への道を開いてくださり、神の言葉に従って生きる歩みの道標となってくださったのです。191-192

「モーセはイスラエルを、エジプトからカナンに導く道標になったけれども、イエス・キリストは、この世から神の国へ、私たちが帰るための道標となってくださった」。そういう意味において「モーセが平面的に、A地点からB地点に、エジプトからカナンに、という導きをしたとするならば、イエスは空間的、立体的に『この世から神の国へ』という私たちの道標となってくださっている。そういう意味でも『イエスはモーセを超えている』のだ」という言い方がここではされているのです。

ですから、この短い文節は、実はキリスト教の教義そのものが全部出て来る部分で、幾ら私たちが一生懸命勉強しても十分であり得ないだろうと思います。ですが、この箇所がしっかり捉えられれば、これから先のところを学んでいく時、それが何なのか捉えるのは比較的容易になって来るのではないかとも思います。

今日この箇所では、大分いろいろ重要な言葉にこだわるような学びになりましたがご意見がありましたら教えて頂きたいと思います。

(一九九六年六月八日)

写者あとがき

今回も御言葉と松山幸生先生のお声が私に迫ってきます。

「あなたが神の家となるためには、確信と希望に満ちた誇りを持ち続けることである。持ち続ける必要がある。持ち続けなければならない。持ち続けべきである」と。

そして「確信に満ちた誇り」とは、「キリストの死と復活と再臨」を核心とした生活、その具体的な行動は信仰によって与えられる。その行動の広がりや深まりは信仰によって与え続けられる。そこに希望があると言われる。(世の中の秩序がどんなに乱れ、混乱騒乱があっても希望がある)

イエスを仰ぎ見て生活してきただろうか。しているだろうか。何を確信してきたであろうか。キリスト者として誇りをもって生きて来ただろうか。それら全ての問いを否定しても「生かされてきた事実は実感できる」。そして、時々思い出したように感謝している自分を観る。この「ヘブライ人への手紙に学ぶ」を熟読吟味し、松山幸生先生の導きを頂き一歩ずつ前進している自分を感じて感謝する日々があります。

この私の遠大な試みを静かに見守ってくださる方々に感謝いたします。

本稿も森容子先生の豊かな言葉に現せない丁寧な監修に導かれております。

説教者として森容子先生は拙稿を声を出されて読まれていると感じます。私の誤字脱字は当然ですが、句読点、一字一角の正確さで校正してくださっています。

私の信仰的未熟さのため、句読点一つで神学的な解釈の誤りが生じます。それらを見逃さず指摘してくださることは、新たな気づきを頂き、信仰から信仰へ希望を頂いて進んでおります。今号は諸事諸般重なり、時間がかかりましたが、第5回とこの第6回の中に「ある大きな変化が具体的にあった」更に確信を深かめ、いつか語ることができれば大きな成長が望めると思っています。

「主の祈り」の最初に「父よ」と呼びかけることのできることはなんと幸いなことか。そのことを教えてくださった松山幸生先生を思い、悩める人々と共に歩める力を与えられていることを謙虚に受けて感謝します。いつも「共にいてくださる神」「共に歩んでくださる友」「共に祈ってくださる友」の有る無しの違いを感じ、この有る無しの壁を一つ一つ乗り越える力を今日も強めたい。(2022/01/03)